

タイトル：『ファニーたい焼きトム
38 照り焼きチキン』

第一幕：驚きの新メニュー発表

「場面一」『たい焼きトム』の朝（店内。
たい焼きの香ばしい匂いが漂う。ほんの
り甘い生地ของ香りに混じり、何やら濃厚
な香りが漂っている。陽気なBGMが流
れ、トムが満面の笑みで試作に励んでい
る。）

トム（30代前半・店主）：（キッチンで
鼻歌を歌いながら生地を流し込む）「ハ
ッハッハ！今日は歴史的な日になるぜ！
新たなたい焼きの夜明けだ！」

魚住（20代前半・バイト）：（カウンタ
ーを拭きながら、遠くから不安そうに覗

く）「……嫌な予感がする……トムさん、
また何か企んでませんか？」

トム：「もちろんさ！見ろ、この艶やかな
黄金色のタレを！このジュシーなチ
キンを！」

（トム、得意げにフライパンを掲げる。
そこには、照り焼きソースがたっぷり絡
んだ肉厚のチキン。照り照りと輝き、香
ばしい匂いが湯気と共に漂う。）

魚住：（鼻をくすぐる甘じょっぱい香りに
思わず顔をしかめる）「……ちよつと、
待ってください。それって、たい焼きの
具ですか？」

トム：「そうさ！その名も……照り焼き
チキンたい焼き！！！」

（効果音：どどん！店内がシュールな沈
黙に包まれる）

魚住：「……いやいやいやいや、無理がありません？たい焼きですよ！？普通、あんこじゃないんですか！？」

トム：「おいおい、魚住！たい焼きの可能性を狭めてどうするんだ！？これは革命だ！新時代のたい焼きだ！これまでの概念をぶち壊す、まさにフアンイーなたい焼きだ！」

（トム、興奮気味にチキンを生地に取り込み、鉄板でじゅわっと焼く。その瞬間、ジュワツという音と共に甘じょっぱいタレが生地にしみ込み、芳ばしい香りが店内に充満する。）

魚住：（香りに思わずごくりと唾を飲む）

「いや……たしかに、美味しそうな匂いはしますけど……」

（トム、にやりと笑いながら、こんがり焼き上がった照り焼きチキンたい焼きをひとつ差し出す）

トム：「ほら、試食タイムだ！この神の一口を堪能しろ！」

（魚住、おそろおそろ手に取る。焼きたての生地はふつくと膨らみ、ほんのりと甘い香りがする。その中からは、ジュワッと溢れる照り焼きソース。トロリとしたタレが黄金色に光る。）

魚住：「……めっちゃ照り照りですね……」

（意を決して一口食べる。カリッと焼かれた外側の生地の後、ふわっと甘みが広がる。そして、その瞬間、じゅわっと広がる照り焼きチキンの旨味！甘辛いタレが舌を包み込み、肉汁が口いっぱい広がる。）

魚住：（目を見開く）「…………う、うまい…………！」

トム：「だろ！？俺の舌は間違っていないぜ！」

（魚住、呆然としながらも、もう一口食べる）

魚住：「なんで、たい焼きの生地と照り焼きチキンがこんなに合うんですか…………？甘みとコクのあるタレが染み込んで、ふわっとした生地と最高にマッチしてる…………！」

トム：「たい焼きは無限大なんだよ、魚住！さあ、これを世に放つぞ！」

（魚住、ため息をつきながらも、結局納得する）

魚住：「…………まあ、美味しいならいつか。」

第二幕：お客のリアクション

（店がオープンし、最初の客がやってくる。店内に広がる甘辛い香りに、客が鼻をくんくんと動かす。）

客一（高校生・男子）：「……なんか、めっちゃいい匂いしない？」

客二（高校生・女子）：「え、なにこれ、たい焼き屋さんの香りじゃない……焼き鳥屋？」

（トム、胸を張って登場）

トム：「ようこそ！新時代のたい焼きを食べにきたな！これはただのたい焼きじゃない！照り焼きのエンターテインメントだ！」

（客一、おそろおそろメニューを見て）

客一：「……照り焼きチキンたい焼き……？」

客二：「え、絶対ヤバイやつじゃん。ていうか、おいしいの？」

トム：「おいしいかどうか……それは君たちが決めることだ！」

（トム、たい焼きをひとつ差し出す。生地が表面がツヤツヤと光り、ほんのり焦げた香ばしい香りが漂う。中からチラリと覗くジュシーな照り焼きチキン。甘辛いタレがしっかりと絡んでいる。）

（客一、意を決してひとくち）

客一：「……ん？……んんん！？うまつ……！」

（客二も慌てて食べる）

客〇：「えっ、待って、想像の10倍うまいんだけど！？甘じょっぱいタレと生地の相性やば！！！」

（次々と客が増え、店の前には長蛇の列ができる……！！）

第三幕：部活帰りの高校野球児たちの試食

（夕方の店内。汗だくの高校野球部の生徒たちが入ってくる）

野球部員一（キャプテン）：「うおっっ、腹減った！練習終わりのたい焼き、最高だよな！」

野球部員〇：「え、待って、たい焼きの中身が照り焼きチキン！？そんなのあり？」

野球部員ω（控えめな性格）：「普通、たい焼きはあんこでしょ……。邪道な気が……」

トム：「ありあり！超ありだぜ、ボーイズ！疲れた体に最高のエネルギーチャージ！食べてみな！」

（野球部員たちが一口食べる）

野球部員一：「う、うまあああ！なにこれ！？外はサクツとしてるのに、中からジュワツと甘辛いタレがあふれ出す！」

野球部員二：「やばい！チキンがプリップリ！噛んだ瞬間、肉汁がドバァッと広がる！これは……。飯テロすぎる……！」

野球部員ω：（静かに涙ぐむ）「……。うますぎる……。これは、スポーツ後の栄養補給に最高の食べ物だ……！」

野球部員一：「見ろよ、このツヤツヤの照り焼きソース！ 噛むたびに口の中に甘辛い旨みが広がる……！ 照り焼きの甘さと醤油のコク、それがたい焼きの皮と絶妙に絡み合って……！」

野球部員二：「皮の香ばしさがまた最高だな！ このカリッとした食感と、ジュワッと染み出すタレのコントラストがたまらん……！ あぁ……もう一個いこう……！」

野球部員三：（もぐもぐしながら）「これ、俺の人生を変えるたい焼きかもしれない……！」

（店内、大盛り上がり。野球部員たちが次々に追加注文する）

第四幕： 高校野球の勝負飯に！？

（数日後、トムの携帯が鳴る）

トム：「もしもし、たい焼きトムのトムです！」

野球部監督：「お世話になっております、
〇〇高校の野球部監督です。実はうちの部員たちが貴店のたい焼きを食べて以来、すごく調子がいいんですよ！おかげで甲子園に出場が決まりました！」

トム：「オーマイガー！マジか！？すごいえじゃねえか！」

野球部監督：「それですネ……試合前の勝負飯として、選手たちに照り焼きチキンたい焼きを食べさせたいんですが、大量発注できますか？」

トム：「もちろんだとも！！！」

（魚住、驚愕）

魚住：「ええ！？そんなに大量に！？間に合います！？」

トム：「大丈夫だ、魚住！俺たちはたい焼き職人だ！やるしかねえ！！」

（徹夜で仕込み開始）

トム：「魚住！照り焼きのタレの具合は完璧か！？もっと照りを出して、ジュワツと感を増すんだ！」

魚住：「トム、もう厨房が照り焼きの匂いで充満しています……！深夜にこれ嗅いだらお腹減っちゃいますよ……」

トム：「それが飯テロの力だ！！」

（厨房では香ばしい醤油の香りと甘いみりんの香りが充満し、たい焼きの皮が焼ける香ばしい匂いが広がる）

第五幕：高校への大量配達と 魚住の焦り

（翌朝。トムと魚住、大量のたい焼きを
車に積み込み、高校へ向かう）

魚住：「こんなに大量のたい焼きを配達
するなんて、初めてですよ……！」

トム：「いいじゃねえか！これは俺たち
のたい焼きが日本のスポーツ界に貢献す
るってことだぜ！」

（学校に到着。野球部員たちが拍手で迎
える）

野球部員：「トムさん！ありがとう
ございます！！これ食って、絶対勝ちま
す！！」

野球部員：「勝負飯、届けてくれてあ
りがとう！俺たち、絶対に優勝するか
ら！！」

（魚住、感動しつつもぼそり）

魚住：「……これ、いつまで続くんですかね……」

トム：「ノー問題！俺たちが作り続ける限り、ファニーたい焼きは永遠さ！」

（魚住、遠い目）

魚住：「次こそ普通のたい焼きに戻したい……」

トム：「ノー！次はまたこ焼きたい焼きだ！」

（魚住、ずっこける）

（野球部員たちと笑い合うトム。画面フェードアウト）

終わり

・ 第一幕（約15～20分）

- 新メニュー「照り焼きチキンた
い焼き」の発表
- 魚住の困惑
- トムの熱意と試作開始

• **第二幕（約 15～20 分）**

- 試作過程と魚住のツツコミ
- 試食シーン（飯テロ描写）
- 初期のお客の反応

• **第三幕（約 20 分）**

- 部活帰りの高校野球児たちが来
店
- たい焼きを食べて大絶賛（飯テロ演
出）
- 追加注文で盛り上がる

• **第四幕（約 15～20 分）**

- 野球部監督からの電話
- 甲子園出場決定

- 勝負飯として大量発注依頼
- トムと魚住、徹夜で仕込み（飯テロ

描写）

- **第五幕（約10～15分）**

- 高校への配達
- 野球部員たちの感謝と決意
- 魚住の不安、トムの新メニュー宣言
- コミカルに幕を閉じる